

淀野隆三草稿翻刻（上）

棚田 輝嘉・芦木 亜彩湖・齋田 祥子

一 はじめに

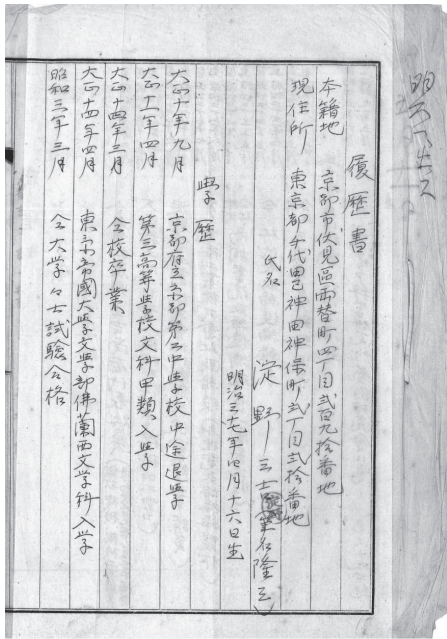
淀野隆三は、ブルーストやジイド等のフランス文学の翻訳者、明治大学教授、そうして何より、梶井基次郎の友人であり、梶井没後、数種類の『梶井基次郎全集』を編纂したことで知られている。一方で、彼自身も文学を志しており、そもそも梶井を知ったのも同人誌『青空』に参加したからであった。その『青空』全28号（淀野が同人に参加してからだと25号）の内、合計10号に小説を載せ、編集後記などを併せれば総計18号に何らかの文章が掲載されている。そういう意味では、『青空』を構成する重要な作家及び編集者の一人だったと言える。『青空』終刊後も、淀野は小説を書きつづけ、後に掲げる昭和20年代に書かれた履

歴書の職歴の冒頭には「著述業」と記している。こうした文学者としての彼の創作活動を追ってみることも、あながち無意味ではないように思う。現在、棚田の元に淀野の履歴書および小説の草稿・断片と思われるものが何編かある。執筆時期のわからないものも含まれているが、「二九二四、一〇、二三」といった日付の付いた封筒に収められたものもあり、大半は『青空』胎動期の執筆状況を探ることが出来る史料と思われる。中には、梶井と重なるようなテーマ、あるいは書き癖のようなものも散見されるので、将来における淀野研究の、そしてまた、梶井研究の周辺の資料として、以下に翻刻を示したい。なお、翻刻作業は棚田と本学大学院博士前期課程在学中の院生二人によるもので、後に示すような翻刻条件を定めた上で、週一度、

それぞれの翻刻を照らし合わせながら、本文を校訂すると
いう作業をしてきた。その上で各草稿の翻刻責任者を決め、
本文の最終決定と、必要な注を付けることとした。(翻刻
責任者は、翻刻本文ごとに、文末に記してある。)

二 淀野隆三略歴

Wikipedia に略歴が記されているが、棚田の手元に淀野
自身による「履歴書」が二種類あるので、それを示してお
きたい。一つ目は薄様の罫線の引かれた和紙、袋とじ三枚



(六頁)、青のペンまたはボールペン書き、一枚目、欄外右
に鉛筆で「明治へ出ス」と書かれているものである。
Wikipedia によると「戦後、佐藤正彰の世話で1952年
(昭和27年) に明治大学文学部教授となった。」とあるが、
これに関連するものであろう。

明治へ出ス 五月十一日

履歴書

本籍地 京都市伏見区両替町四丁目貳百九拾番地

現住所 東京都千代田区神田神保町貳丁目貳拾番地

氏名 淀野三吉 印(筆名隆三)

明治三十七年四月十六日生

学歴

大正十年九月 京都府立京都第二中学校中途退学

大正十一年四月 第三高等学校文科甲類入学

大正十四年三月 全校卒業

大正十四年四月 東京帝国大学文学部仏蘭西文学科入学

昭和三年三月 全大学々士試験合格

職歴

自昭和三年四月 至現在⁽¹⁾ 著述業

自昭和九年一月 至全八月 法政大学予科講師

自昭和十二年七月 至昭和二十四年二月 合名会社淀野三

吉商店代表社員（鋼材、機械、機械工具販売 鉄筋鉄骨工
事、管工事請負）

自昭和十三年十二月 至昭和二十四年三月 大阪精工所自
営（機械製作並ニ機械加工業）

自昭和十九年六月 至昭和二十年十二月 淀野重工業株式
会社代表取締役（製罐工事請負）

自昭和二十年七月 至昭和二十二年八月 第一電接工業株
式会社取締役（各種電気溶接棒製作）

自昭和二十二年八月 至昭和二十三年五月 株式会社高桐
書院取締役編輯長（図書出版）

自昭和二十三年五月 至昭和二十四年二月 全社代表取締
役編輯長

自昭和二十六年五月 至現在 株式会社三笠書房編輯長
学会並に社会に於ける活動

自昭和五年六月 至昭和七年五月 日本プロレタリア科学
研究所芸術研究会に属し、フランス十九世紀レアリスム
の研究に従った。同研究所が七年五月プロレタリア科学
者同盟と組織替えを行った時、常任中央委員・芸術部長
として『マルクス・レーニン主義芸術学研究』を編輯し
た。この団体には昭和八年五月まで加盟。

自昭和五年六月 至昭和六年六月 季刊誌『詩・現実』を
編輯発行、古典および現代の新文学を紹介、これら海外

の文学との接触によって、わが国の新しい文学に国際
性を附与しようとする運動を志した。

自昭和七年五月 至昭和八年十二月 日本プロレタリア文
化聯盟中央常任委員として文化団体の統一活動に尽し
た。

自昭和九年四月 至昭和十年六月 文芸雑誌『世紀』を創
刊して、新作家の紹介に尽した。

自昭和十七年六月 至昭和二十年八月 日本文学報国会近
畿連絡部常任幹事として、官僚的文学統制と便乗主義的
文芸家に反対する内面的な活動をした。

（翻訳書、論文、批評等については次の項に記した。）
自昭和十一年二月 至昭和十二年三月 京都商工会議所
議員、交通部会所属。

自昭和十七年六月 至昭和二十二年一月 京都市会議員
（ボス政治と官僚的政治統制に反対、自由な政治的結合
を主張して特高に睨まれた。）

自昭和十七年三月 至昭和十八年四月 京都市翼賛壮年
団理事、後総務。（昭和十八年一月一日より団則改正に
より総務となったが、四月末改選に際して、自由主義者
の理由にて解任された。「理事会」では常に納得のゆく
運動を主張したので、右翼派から何時も攻撃された。）

自昭和十八年六月 至昭和十九年七月 京都市名誉職参

事会員、

自昭和二十年十二月 至昭和二十一年九月 日本自由党京都支部幹事・青年部長、常議員。

自昭和二十一年十月 至同年十一月 京都市民主党執行委員、書記長（憲法草案に於ける主権の所在について自由党本部と異見解だったので、脱党、地方政党を結成した。）
自昭和二十一年六月 至現在 新日本文学会、日本文芸家協会、日本ペン・クラブ等の会員。

（*このあとに「著書学術論文目録」として、十七件が掲載されている。これは後掲のもう一つの履歴書の方が詳しいので、そちらを翻刻することとし、省略するが、最終行は「ジイドの「ファッシュズム」反訳」の項となっており、そこで唐突に終わっている。が、さらに同じ用紙、別冊袋と同じ一枚（二頁）、筆書きが存在する。右の履歴書に追加するような内容で、「一、アンドレ・ジイド「日記抄」から始まり、先の履歴書以降の著述データを追記（10件分）したものとなっており、その末尾に）

賞罰

一、なし
右の通り相違ありません

昭和三十六年三月

淀野隆三 印

とある。同じく Wikipedia によると、「1963年（昭和38年）から1965年（昭和40年）まで明治大学人文科学研究所所長を務めた。」とあるから、そのために作成されたものだろうか。

（一）アンドレ・ジイド「日記抄」(全九巻)	建設社全集第6巻 (昭和九年)
（二）アンドレ・ジイド「日記抄」(全九巻)	建設社 (全九年)
（三）アンドレ・ジイド「日記抄」(全九巻)	建設社 (全九年)
（四）アンドレ・ジイド「日記抄」(全九巻)	建設社 (全九年)
（五）井原西鶴小説全集	文園堂 (全十年)
（六）アンドレ・ジイド「日記抄」(全九巻)	建設社 (全九年)
（七）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（八）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（九）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一〇）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一一）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一二）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一三）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一四）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一五）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一六）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一七）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一八）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（一九）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)
（二〇）ジイド「文学講座」	竹村書店 (全十年)

また、これ以外に、「阪本越郎の乞うまゝに記す。」と記された履歴がある。これも以下に示す。

記 昭和三十九年三月十二日、阪本越郎の乞うまゝに記す。 淀野隆三

一、昭和十一年三月より郷里に帰り亡父の業を継ぐ（合名会社淀野三吉商会²）。他に、大阪精工所を自営（昭和十三年十二月～二十四年三月）、淀野重工業株式会社

一、昭和二十五年九月、明治大学講師、二十七年四月、教授（文学部）、今日に到る。昭和三八年五月、全大学人文科学研究所長。

の代表取締役社長として、住友化学工業KK、神戸製鋼所、大阪金属工業KK、日本軽金属KK等と取引する（敗戦まで）。この間、京都商工会議所議員、（昭和

一、昭和六年 マルセル・プルースト『スワン家の方』I を佐藤正彰との共訳にて出版。

十一年二月 全十二年三月）、京都市会議員（昭和十七年六月～二十二年一月）、京都市翼賛壮年団理事（十七年三月～十八年三月）その他の公職につく。

一、七年 「マルセル・プルーストの芸術について」（『マルクス・レーニン主義芸術学研究』第二輯。）

一、昭和二十二年十二月、日本自由党に加盟、京都支部幹事、青年部長として政治運動、二十一年十月、自由党の憲法草案における主権在君に反対して同党を脱し、同月、高山義三と共に、京都民主党を結成、執行委員書記長。

一、昭和八年 「アンドレ・ジイドの転向について」（『改造』十五卷八月号）

一、七 「フランスのプロ文学運動について」（『プロ文学講座』第二輯。）

一、七 「梶井基次郎に就いての覚書」（『文学界』十二月号）

一、昭和二十一年六月、新日本文学会、日本ペンクラブ、日本文芸家協会に加わる。

一、昭和九年 「ジイドについて」（季刊『文芸評論』^マ（第一年第二輯）

一、昭和二十二年八月よりKK高桐書院に入り、編集長、後代表取締役として良書の出版に努めて失敗、家産を蕩尽する。

一、七 「梶井基次郎全集」全二卷（六峰書房より編集発行）

一、昭和二十五年一月、単身上京、KK三笠書房に顧問として入社、後、編集長、常務取締役、二十七年三月倒産寸前の全社を再建の方向に置くと共に、退社。

一、七 「アンドレ・ジイド『モンテーニュ論』（三笠書房）

一、七 アンリ・ドラン『ニイチェとジイド』（建

設社より高沖陽造と共訳出版)

全三卷(筑摩書房)

一、
ク
アンドレ・ジイド『日記(一八八九—

一九〇四)』(建設社『全集』第八卷)

一、昭和十年七月「現代浪漫主義の一態度」(『日本浪漫

派』(第一卷第五号)

一、昭和十年 シャルル・ルイロフィリップ『小さき町に

て』(岩波書店・文庫、)

一、昭和ク
アンドレ・ジイド『日記(一九二九—

一九三二)』(ジイドの転向日記) 文圃堂出

版、

一、
ク
ジイド「ファッシスム」(『作品』第四卷第

七号)

一、昭和十二年『ジイド文学読本』(竹書房、四月刊)

一、昭和二十五年『ボヴァリイ夫人』(三笠書房)

一、昭和二十八年 フイトップ『ビュビュ・ド・モンパル

ナス』(岩波書店)

一、
ブルースト『スワンの恋』(三月〜四月I、

II、新潮社)

一、
二十九年 ジイド『狭き門』(角川書店)

一、
三十年 ブルースト『見出された時』II(新潮社)

一、
三十一年 ジイド『背徳者』(角川書店)

一、昭和三十三年二月〜七月 決定版『梶井基次郎全集』

一、昭和三十七年十一月 ラファイエット夫人『クレープの

奥方』(角川書店)

一、昭和三八年 「フランス後期浪漫派および初期実学派

におけるl'Art pour l'Artの理論の研究」

(明治大学人文科学研究所『年報』)

(以上、担当 棚田)

後者は、「阪本越郎の乞うま、に記す。」と用紙上にポールペンで書かれ、挿入・削除等の書入れも多々あるので、正式な書類ではなく、阪本の心覚えのために書かれ渡されたものと思われる。阪本は詩人・ドイツ文学者であると同時に、御茶ノ水女子大学の教授でもあったので、非常勤の依頼といった用件があったのではなからうか。

【注】

(1) ここから先の履歴書の記事、「自〜」と「至〜」の部分は、角書きになっている

(2) 同(1)

(3) 「コレノ同人デアッターヲ書オトシマシタ。」と横に書込
み

三 草稿翻刻

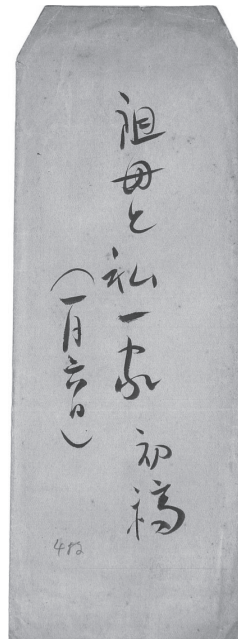
草稿翻刻に当って、次のような翻刻規則を定めた。

淀野隆三草稿 翻刻基準

- ① 草稿本文の「最終形」を提示する。
 - * 削除・挿入等について、一々示さず、その草稿における淀野の構想していたと思われる最終形のみを示す。
 - ② 漢字については、「見え方」を尊重し、旧字は旧字、新字は新字とし、略字（新字と同一の場合も）は旧字で翻刻する。
 - ③ 句読点は、「見え方」により判断し、内容による判断は行わない。
 - ④ 改行による字下げも、③に準ずる。
 - ⑤ 解説不能部分については、文字数分○で示す。
 - ⑥ ルビはそのまま翻刻する。
 - ⑦ 誤字・脱字等そのままとし、ママと注記する。
 - ⑧ 内容において、分かりにくい部分については、各翻刻末に【注】を付し、解説する。
 - ⑨ 促音・拗音は小書きとする。
- こうした判断の理由については一々記さないが、大正末以降の草稿であるという時代条件、草稿という原稿の性質

（完成度）などを勘案して、もっとも淀野の息遣いが分かる形式となるようにという判断によるものである。

祖母と私一家



祖母と私一家 小説（一月六日午後三時始む）

(一)

一週間も雲の間から太陽をながめたことはなかった。今日もまたしても軒場おつる雨だれが、滅入った気分に伴奏する様に石をた、いて居る。

氣のはやい蚊はもうボーフラの生活を終つて人をさすことを習ひはじめた。

私はその頃、華やかな○の高校生活の才一年を初恋のなやみに苦しむで居た。恋になやむ者にとつて中庭は楽園となるかと思ふとまたつかのまに、地獄となる。

雨にぬれて帰宅した私に、母は話しかけた、

らい、がなあ」

「けんかなんて誰れもし度い事はあらへんが、今日もおむめが、『とだなをおうきませう。梅雨でじけくしますから』と云ふたら、その挨拶がどうどす、『ほつといっておくれやす、目がわるうても、とだな位はふけます』と云ははるのどつすやろ、おむめが可哀さうやし、妾もつい云ひましてん」

「もう云はんといて、俺がおばあさんに、あんばい云ふさかい。目がわるいのが一番悪いね」

私はかばんをほりだして、急ぐ制服のまゝで「隠居」にいった、なるほど隠居は主屋オモヤにまして陰氣だつたし、じめついて居た。

「ただいま」「おかへり」といつもの挨拶をしてから、私は急ぐに「おばあちゃん、梅雨でしけるよつておむめに、そこらおふかしや。なにも遠慮することあらへんやないか、この障子でもきたないこと。へえ。え、か、おさしや」

私は祖母を十九の今日も「おばあちゃん」と云つてよんで居るほど、私と祖母とは仲がよかつた。祖母は私一人を孫と思つて居るらしかつた。(私には三人シの妹がある)そして私も祖母の盲愛メに対して払ふべき義務を痛切に感んじて居た。私の云ふことに祖母は決してさからはなかつた。父のこえも祖母は唯々ときいたが、私のをより以上に祖母

はきいた。

「あ、してもらひます。」

「してもらひますて、今日もことわつたんやないか、」

「ごはんをたべて、ほつとしたとこやのに、しりから〇のたつ様に、とだなをふきます云はれても、ふいてもらえへん。」

「そんならあとでと、うまく云つたつたらえ、ねや、そうやろ、え、そうおしや。おこらしたらそんや、奉公人はたらかして使はな」

「へえくゝわかりました」

祖母はいつもの様な半分なげやりな、半分親しみの言葉でこのまづい会話をうちきつた、そして氣候のことや、私の試験のことをきいた。西の家(私の書齋のある別荘だ)はこの家より川の傍やから蚊が多いだらうなどもマきいた。

そして私はや、軽き心になつてから

「さつき云ふたことよろしか。おむめもおつかひや」と云つた、祖母は何時もの返事をした。

そして私は「さいなら」と云つて長火ばちの傍を離れた。「もう送らんかてもよい、」ととだなをたよりに送らうとする祖母を坐らせて私は主家に来た。一歳上の女学校三年の隆子も小学三年の法子ヒコも帰へつて、また母と祖母のこと

を話して居た。

「おかあさん、具合よう云ふといたけ、もう、あんなことのない様に皆氣をつけないかん折角面白い家が氣まづうなるよつてな」

「あんばい云ふてはつたら、誰もすきやこのんでけんかなんてするものあらしまへん。さあ、おたべ、先きに皆よばれてますね」と母は金鰐をだしてくれた。私は一つをたべながら

「目もわるいねし、義理やちふひけめもあるのやし、あんばいしてあげないかん」と云つた。さつきから私と母の會話をきいては、母の顔を見て居た隆子は

「目が悪るかつたら、自分でおとなしうしたらえ、ねや、それをえらさうに御隠居さんがぼするさかいに、嫌らはれるのや、わてかて、可哀がつたけるけど、あんな小面にくい人！」

「馬鹿、だまつて」と私はとがめた。「お前等は女やしもつと心切にしたりてもえ、やないか、自分の方から親切にしたりたら、おばあさんでもちゃんとしやはるにきまつてる」「あほらしい。なに云ふてはんね。にいさんがおふるへはいる時には手拭や、湯上りやとばたくしやはるけど、妾等が『おさきに』云ふても返事もしやがらん。あがつてからでもさうやだまつてしらん顔してやかんね。あんな小

面にくに誰があんばい云ふてやるもんか」

私は争ふことは無駄○なことを知つて居たので、これ以上この話題を追ふことをさけた。實際私は、祖母を愛してやれと人に強制することができぬ、ひけ目を持つて居た。それは祖母が私一人を愛することだった。私のためには、祖母はしんでもしてくれると云つてもいい。私の帰りがおそいと主屋に○回となく、「まだかく」とよぼくとだつねに来る。風呂がたつと勝雄を一番にと私をよぶ。私は祖母のアイドルの様な節がある。

この点が、他の人々に祖母がきらはれるにあづかつて力があるのだ。私自身もあまりのおせつかいに腹立しくなることがある。ことに妹たちと、

「にいさん、おばあさんがやかましいのよ、早うお風呂におほいりな」

「先にはいりたかつたら、はいれ」

「そんなこと云ふたて、おばあさんがきかはらんへん」

「よし俺がは入らう」などと、祖母に「私のことをあんまりやかましい云はんときや」と叱る様に云ふこともある。がやっぱり「おばあちゃん」と云つて私は祖母を大事にして居る。祖母は、たとへば、無縁の石塔で、私は、それに水かける親切な参詣人だ。ことに、その無縁の石塔に数々の幼時の思ひ出を刻みこんで居る私は、どうしても祖

母をほつておくことは出来ない。

【注】

(1) 醤油のことか？

(2) 「おうめ」をさす。

(3) 「ほうりだす（放出）」の京都弁か。

(4) 四枚目欄外に

私勝雄十九

女学校四年 十六

小学三年 九

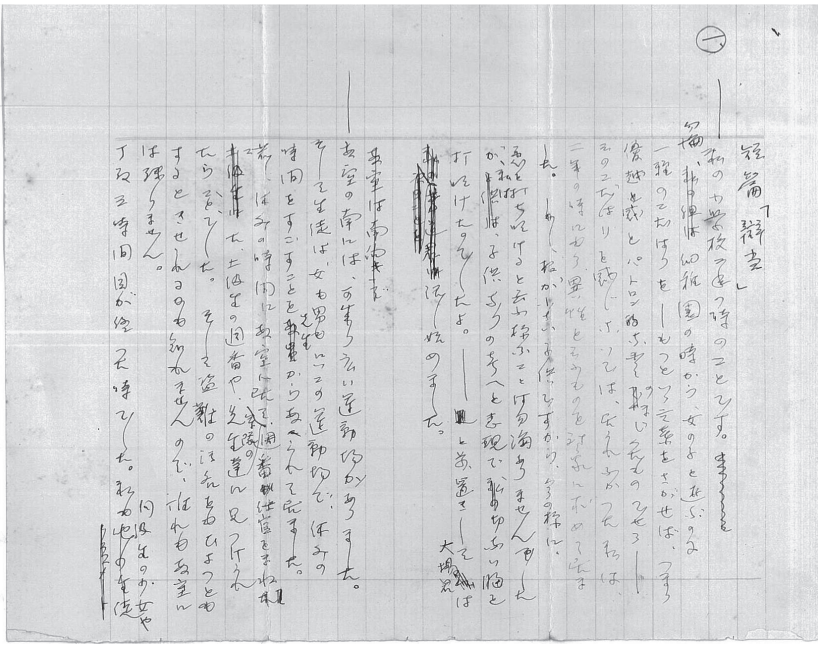
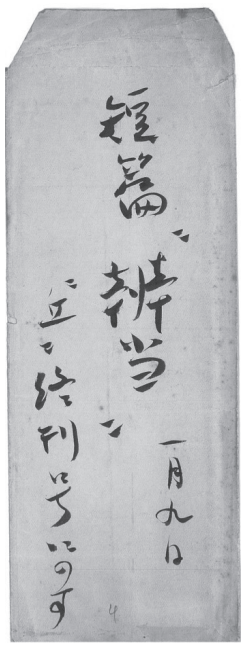
とあるが、作品中では「三人の妹」と記してある。

(5) むやみに可愛がること。

(6) 「幾」か？

(担当 芦木)

弁当



短編「辨当」

——私の小学校二年の時のことです。

勿論、幼稚園の時から、女の子と遊ぶのに一種のこだわりをもっとい、言葉をさがせば、つまり優越感とパトロンのなまじったものでせう——そのこだわりを感じないでは、居られなかった私は、二年の時にもう、異性と云ふものを対象に求めて居ました。しかし根が小さい子供ですから、今の様に、恋と打ち明けると云ふ様なことが勿論ありませんでしたが、私は、子供なりの考へと表現で、切ない胸を打明けたのでしたよ。——と前置きして大場君は話し始めました。

——教室の南には、可成り広い運動場がありました。そして生徒は、女も男も只この運動場で、休みの時間をすごすことを先生から教へられて居ました。若し休みの時間に教室に居て、軍隊の週番仕官をまねてた、上級生の週番や、先生達に見つけられたらことでした。そして盗難の汚名をもひよつともするときせられるかも知れませんが、誰れも教室には残りません。

丁度三時間目が終わった時でした。私も同級生の少女や少年と共に運動場に一度は出ましたが、便所に行く風をして又教室に只一人もどつて来ました。なんだか悪いこ

とをすると云ふ様な感じを、やっぱり抱いて居ましたが、もどらすには居られなかったのです。立ってはいると運動場からも又教室の北側に健って居る教室からも見えませんが、私は前後に気を配りながらほとんど亀の様にはって教室にはいりこみました。勿論大きい目的を私はもつて居たのです。

——二年はまだ女と男のが混合^{マダジ}って居ました。男の組長が私で女の組長は大平道子と云ふ人でした。私が人と云ふのには訳があるのです。道子さんは、實際母の様な感じのする少女でした。私より背も大きい様に記憶して居ますが、一言で説明するならば、日曜学校の先生と云ふタイプでした。そして彼の女は實際キリスト教日曜学校長の愛娘^{アイムコ}でした。私は道子さんにはなんだが母と、年上で、私を世話して下さる人と云ふ様な感じで接して居ました。

「大場さん、私が今日は当番ですから、あなたがのこらいてもえ、わ」と江戸ッこでもある大平さんは京都辨と江戸辨とのまじった言葉をつかひました。それが又母と云ふ感じを深くしたのでせう。その大平道子さんに私はたしかに恋をかんじて居たのです。

それからもう一人の男の子のことをお話ししなければなりませんそれは石原保と云ふゲホー^{ゲホー}さんの様な頭をした頭ばかりの男の子のことです。そのゲホー頭は後ろにそつて

ました。私等は石原の「なぎなたゲホー」とはやしたものです。

その男の子は大人しい、子でした。つまりこのゲホーサンと道子さんと私と三人の間に起った事件なんです。お話しはもとにもどりますが、私は盗みでもする気で教室にしのびこみました。そして大平道子さんの席と、石原の席から辨当をとりだしたのです。そしていざりの様に両手に辨当をはめて、教壇の横の教室の隅にある三角柵、の一番上に、よく生徒の目につくとそこにそれをかさねておきました。大平さんのは赤い花模様だったと思ひますし、女と男の辨当だと云ふことは一目で明瞭です。それらを重ねておく^マと私はぱつ。として、教室をまたはひだしました。やがて、四時間目の鐘がなつて私達は教室にはありました。そして先生の授業をうけたのです、出る時に次の時間の道具を出しておく規則なので、誰れもはいつた時には机を明けることは許されません。大平さんも石原も自分達の辨当の紛失は知りません。

私はそれから、先生の目をぬすんでは、近所の生徒にある三角柵を見ろと合圖したんです。私の周囲のものは、組長さんの私の手下でしたからみな見ることは見ましたが、それが誰れのものかわかるまでは、別に大した興味をひかれなかったことはたしかです。私は今誰れのだと名指して

はした私^ががばれると考へましたので、知らぬ風をして居ました。おひるの鐘がなりましたので先生は「みな静かに御あがりなさい」と云つて出て行かれました。

私は「うまい」と思ひました。その次の瞬間、私の前の生徒が一番に、「あんなことしときよる誰れや。」と辨当のことを云ひだしました。臆病な石原と、母の様な道子さんは、各々の性格まるだしで、べんとうをとりに行きました。その時、私は大将になつて、「あやしい、あやしい」とはやし立てたのです。が、私の附近の四五人の級のものはなんのことか知れませんが、初めはばんやりみつめて居ましたが私たちのはやしかたが猛烈なので、ついそれにのつて、手を只訳もなくなつて「あやしい、あやしい」を合唱しはじめました。石原の其の時の顔と、道子さんの「子供にはこまる」と云つた様なしかも子供らしいはにかみを私は今でも忘れられません。そして私はまだくはやししました。とうく石原は泣きました。道子さんはみんなを叱る様に制して、石原のわきに來て、なぐさめ、はじめました。私を除いた時のものはビタリと「あやしい」をやめました。その時私は只一人見はなされて、「あやし」まで云つて、改めて石原と道子さんを見ました。私は石原が道子さんにすかされて居るのをじつと見ました。ほんとうにじつと見ました。(なんと云ふ結果だ。こんなことなら、龜の

まねもしないに」と胸かつかへて来ました。その時私の目は道子さんの目にあつたのです。その日の辨当のまづかつたこと。——大場君はこゝで話をきりました。そして、道子さんは「こまりますね」と云つた顔でした。

——君が僕を恋愛病患者と云ふのはもつともだよ。——と私をみつめながら、でも悲しく笑つて云ひました。

——一九二五・一・九——「終」

附記（恋愛病患者と云ふ仏ランス語を知りたいと思ふ）。

一・

二年甲組の組長の信吉は、他の生徒を便所でまゐて、只一人自分の教室に通ずる廊下を、前後左右に気を配りながら、亀の様にはつて居る。

教室がすぐ隣つた南の運動場から、女の子や男の子のはねまわる声がかきこえる来る。が、亀の信吉の耳にははいらなかつた。遂々、彼が休みの時間にはいることを禁ぜられて居る教室にはあるや否や一度首をもたげで、運動場の方を見たが、誰れも窓に登つて居るものなどはなかつた。彼は中腰になつた。そして一番うしろの列のひとつの机から白木錦のフロシキでつゝむだ弁当をとりだした。

彼はその時、もう一度、今度は運動場と反対の教員室の方を見た。週番の上の生徒の姿はなかつた。彼は、ワツと

一番前列の運動場に近い机から、友禪フロシキの辨当をとりだした。そしてすぐそばの三角用柵の上へ、花模様を下にして、白木錦の弁当をかさねた。その時信吉はほつとした顔色を浮かべた。そして次の瞬間には又亀の姿勢で教室を出て行つた。もう誰れも居なくなつた。そして又一しきり運動場のよろこびの声が窓がらすをひゞかせて居る。

二・⁽³⁾

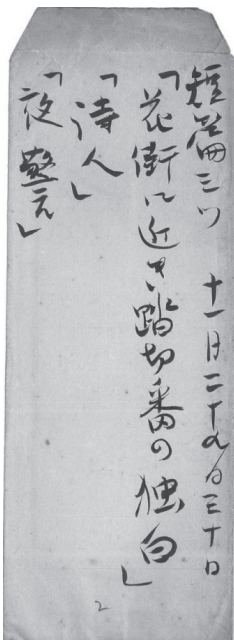
【注】

(一)「二緒」の意味と思われる。

(二)ゲホーは外法。ゲホー頭（外法頭）は上部が大きく下部の小さな頭のこと。

(三)章数字のみが書かれ、以下の本文はない。（担当 齋田）

短編三つ（「花街に近き踏切番の独白」「詩人」「夜警」）



①

「花街に近き踏切番の独白」

情景
番小屋の右に中央に道路。遮断機あり。
番小屋の右に中央に道路。遮断機あり。

一景

「この不景氣にやつぱりこの道ばかりは変らんでへ、へ、へ。こつちも向ふ岸もこの燈のちよつとついたところは素敵ぢやねいか。乙に三味まで流れて来るぜ。なんだ、「悪どめせぜとも——」だ。しやれるない。まだ宵の口だせ。畜生たんと騒ぎやがれ。

二景

「もうかれこれ十時だらう。畜生、向ふの二階の光景はどうだ。幽霊だつて、もつと元氣にやるぜ。俺があの中に居たら、あれでおかすものか。騒いでく二階をふみやぶつてやらう。おつと俺は六十円の会社員さまだ。「ぶすか、あの御亭主様だ。けど、この道は金とは別だ」とよへ、へ、へ、へ、へ。

「花街に近き踏切番の独白」

情景

後景に紅橙の軒を並べる。中央左より番小屋（半間此方位）番小屋の右に中央に道路。遮断機あり。

一景

「この不景氣にやつぱりこの道ばかりは変らんでへ、へ、へ。こつちも向ふ岸もこの燈のちよつとついたところは素敵ぢやねいか。乙に三味まで流れて来るぜ。なんだ、「悪どめせぜとも——」だ。しやれるない。まだ宵の口だせ。畜生たんと騒ぎやがれ。

二景

「もうかれこれ十時だらう。畜生、向ふの二階の光景はどうだ。幽霊だつて、もつと元氣にやるぜ。俺があの中に居たら、あれでおかすものか。騒いでく二階をふみやぶつてやらう。おつと俺は六十円の会社員さまだ。「ぶすか、あの御亭主様だ。けど、この道は金とは別だ」とよへ、へ、へ、へ、へ。

「うん中書島行きか。邪魔くせい。この通つたあと
の冷い風はどうだい。それに、畜生め、酒と女の香をまぜて。やせるぜ。やりばがないぜ。あんばいやつたれ。

がら、勿論、本分を忘れてしまつて、戸毎にわめきたてた。あるところでは、「戸、しまりよいか」と。がある家の戸をかたつかせて、

「目をむいて、おしやす」とやつた時まだ新床の香さめぬ新夫婦は、驚きのあまりとび起きた。が、一瞬の後には、二人は夜の魔の網にからまれて、力なくあかときへとよこたはる。

それでも夜警は二三日続いた。(三十日書きなほす)

【注】

(1) 無理やりひきとめること。歌舞伎葛葉宇都谷峠(文彌殺し)に「何も女郎買ひにでも行くといふのぢやあなし、わる留(ド)めをするにやあ及ばない」との記述がある。

(2) 京都市伏見区の地名。

(3) 指先でつねること。京都や大阪、富山、愛媛など広い地方で方言として用いられている。

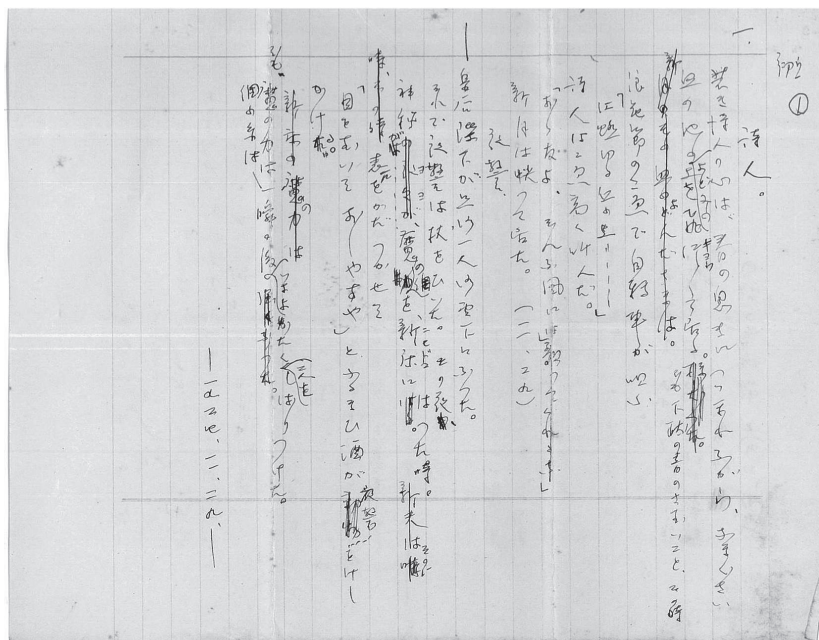
(4) 「いけまい」の訛りか。

(5) 同一ページに記してある。「夜警」だと思われる。

(6) 目を開いて、起きてという意味か？

詩人。

若き詩人の心は、春の思きにつゝまれながら、なまぐさ



い血の池のよどみの上を飛行^{トウキョウ}して居る。でも下駄の音のさむいこと、その時浪花節のこゑで自転車^{ジキヤ}が唄ふ

「紅燃ゆる丘の上……」

詩人はこゑ高く叫んだ。

「お、友よ、そんな風には」

新月は光って居た。(一一、二九)

夜警、

——皇后陛下が只御一人御○下になった。

それで夜警は杖をひいた。その夜、

神様が、魔の網を、新床^{ニヒド}にはった時。その表戸をかだ^{ママ}つかせて

「目をむいておしやすや」とふるまひ酒が夜警をけしかけ
る。

でも魔の力は網の糸は一瞬の後いよ⁽²⁾かたく二人をはりつ
けた。

——一九二四、一一、二九——

【注】

(1) 旧制第三高等学校の寮歌

(2) いよいよ

(以上 担当 芦木)

(以下、次号に続く)

(たなだ てるよし・実践女子大学教授
あしき あやこ・実践女子大学大学院
さいた しょうこ・実践女子大学大学院)